

原 著

口腔ケア関連の教育プログラムが歯科衛生学生の
口腔ケアに関する意識・認識・態度に及ぼす影響黒木まどか¹⁾ 晴佐久 悟²⁾ 青木 久恵²⁾ 中島富有子²⁾
窪田 恵子²⁾ 堀部 晴美¹⁾ 内藤 徹³⁾

概要：本研究では、歯科衛生学生の口腔ケア教育を充実させるために、現在実施されている口腔ケア関連の教育プログラムが歯科衛生学生の口腔ケアに関する意識・認識・態度に及ぼす影響について調査することを目的とした。2017年4月に入学した歯科衛生学生62名を対象とし、その教育プログラム実施前の1年次と実施後の3年次に口腔ケアに関する質問紙調査を実施し、それらを比較した。両調査に参加した53名（回答率82.8%）のデータを分析した。ほぼ100%の学生が口腔ケアに興味があり、80%以上の学生が資格取得後、仕事で口腔ケアに関わりたいと感じていたが、調査間で差は認められなかった。教育実施後では、口腔ケアの対象者で、病棟患者、癌患者の認識率が有意に増加し（ $p<0.01$ ）、口腔ケアの提供場所で、在宅、回復期病棟、がん専門病院の認識率が有意に増加した（ $p<0.001$ ）。口腔ケアの誤嚥性肺炎の予防効果の認識率は1年次の56.6%から3年次の92.5%に有意に増加した（ $p<0.001$ ）。口腔ケアを学ぶのに必要と思う時間数は、口腔ケア教育実施後に有意に増加した（ $p<0.05$ ）。

以上より、実施されている口腔ケア関連の教育プログラムが口腔ケアに関する認識・態度の向上に貢献している可能性が示唆された。向上が認められなかった意識・認識・態度について検討し、口腔ケア教育プログラムをさらに充実する必要がある。

索引用語：口腔ケア、歯科衛生学生、口腔健康管理、歯科衛生士教育

口腔衛生会誌 70 : 152-160, 2020

(受付：令和2年3月12日／受理：令和2年4月27日)

緒 言

近年、歯周病が糖尿病¹⁾や心血管系疾患²⁾、早期低体重児出産³⁾のリスク因子であることの報告がされ、口腔と全身の健康との関連は一般的に認識されるものとなってきた。また、歯の健康状態は認知症や死亡率、および障害による平均寿命の短縮に関連することも示されている⁴⁾。さらに、歯科医療従事者による専門的な口腔ケアや多職種による口腔衛生の保持により認知症高齢者の誤嚥性肺炎や入院患者の人工呼吸器関連肺炎への予防効果が報告され、健康寿命の延伸において、口腔の健康管理の重要性は一層高まっている⁵⁻⁷⁾。

日本では、65歳以上の人口はわずかな期間で急速に増加し、2005年に20%を超え超高齢社会に突入して以

降、2018年には28.1%に達しており、2025年には30%を超え、2065年には40%に近づく予測されている^{*1)}。歯科医療の発展や国内の政策の成果から、残存歯を多く保有する高齢者は増加傾向にあるものの、一方で、高齢者のう蝕や歯周病の有病者率は増加している^{*2)}。こうした現状は、将来、歯の問題をもつ高齢者数の増加を想起させるものである。

現在歯科衛生士は、歯科診療所での歯科予防処置や歯科診療補助業務に加え、入院患者や高齢者の口腔ケアの担い手として社会的な期待を背負う専門職としての位置付けにあり、歯科医療の範囲に留まらず、医科・介護分野と協働した、医療・保健・福祉の場で専門性が求められている^{8,9)}。

このような社会的状況にある超高齢社会のわが国にお

¹⁾ 福岡医療短期大学歯科衛生学科

²⁾ 福岡看護大学

³⁾ 福岡歯科大学総合歯科学講座高齢者歯科学分野

^{*1)} 内閣府：令和元年度版高齢社会白書。https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf (2020年1月7日アクセス)。

^{*2)} 厚生労働省：平成28年歯科疾患実態調査：歯の状況、歯肉の状況。https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/62-28-02.pdf (2020年1月7日アクセス)。